

149
360

版權所有

成田山不動尊印文大緣記

定價金參錢

017210-000-0

特16-775

成田山不動尊印文大緣記

三橋 吉兵衛 / 編

M27.5

ABE-0583



●成田山を御参詣は諸君よせに御用心
 元祖三藥は儀を旅人宿る自らせり費等不仕候

成田山御三藥本家元祖廣告



産前産後血の道一切寸白乳の出るは勿論
成田山明王散
 安産の大妙薬 サフランザイ
 一包入三錢二包入五錢四包入拾錢拾
 三包入參拾錢
 成田山大日大聖不動明王へ備へし護摩御
 騰にて丸じ上げ候
成田山一粒丸
 大人小兒はら一切の大妙薬
 一包壹錢貳錢參錢五錢拾錢貳拾錢
 切さず一附にて効あり湯水に入れてよし
 無類の良劑あり
成田山血留明治散
 一包壹錢同金貳錢同金五錢

●第一急病之氣附むしよくしやう
 しやくつかあ●小兒五かんきやうふ
 虫をさむ●たいせき●りうん●胃病
 は●病●なり●血●しら●血●づ●つ●ら●ま●ひ
 ●む●ね●の●や●ける●は●よ●し●酒●の●二●日●は●ひ
 ●せ●ん●き●す●白●●酒●毒●を●け●し●は●は●り
 ●り●ひ●な●も●と●あ●しく●虫●み●ず●る●よ●し●水
 ●あ●かり●●は●さ●下●し●よ●ら●ん●い●ふ●り●と●ら●下●り
 ●は●ら●り●●は●さ●下●し●よ●ら●ん●い●ふ●り●と●ら●下●り
 ●お●こ●り●●は●さ●下●し●よ●ら●ん●い●ふ●り●と●ら●下●り
 ●せん●じ●用●て●よ●し●●荷●又●鳥●犬●の●病●●牛●馬
 ●の●虫●腹●を●拾●五●粒●用●て●大●効●あり
 ○用法
 大人一度に拾粒小兒四粒一日に三度つ
 白湯まで用ゆ

登録商標



目 抽家製する所の藥効は則ち不動明王の利益の如し故に成田山へ
 抽家より左記の如く奉寄附候なり
 御膳料 金參百圓 本堂再建 金五拾圓 護摩木山三段九畝二拾六步此代
 金百四拾圓 紺紙金泥大般若經五卷 金百圓 成田町田地八畝拾五步此代
 金六拾圓 成田山内地内へ玉垣奉納金四拾五圓二拾五錢 同燈臺金二拾六
 圓 東京深川公園地不動堂左右へ玉垣奉納 金五拾六圓
 合計金七百一拾六圓二拾五錢也
 成田山新勝寺並に成田山出張所へ成田山一粒丸を明治拾七年に至り七萬
 五千個寄附致し候なり
 ○成田山東京へ開帳中は成田山一粒丸從來より抽家に於て出店仕候

不動尊印文大縁記

當山寶庫秘し置御印文は人皇百三代
 後柏原帝の御宇文龜九壬申年秋九月本尊に參詣せし僧當國生實の
 庵にて幼稚の時出家し淨土門に入て道譽といふ生得愚鈍にて學行
 よくときを悲み身命を抛て參詣し丹誠を凝せ處滿願の曉夢中よ不
 動の利劍を呑と思へば夢さめたり傍を見るに鈍血流衣わあけま
 染ければ正しく是顯然の利益ありと信心膽あまたへ夫より他念あ
 く修行せし其頃生實も千葉家の四天王原越前守の領地にてその妻
 女は世に稀なる痲症つよく我思ひ立しこと少しも後る時は俄に
 羅刹の如くにあり人を捕へて打擲せ折るも七月此事ありしが庭中
 の池のあか蓮の花一莖を生じたりろの花精々として如來も花よ
 在すがごとく美しけれは越前守の妻は花を詠めて誰か池中の蓮花
 を取來れといふもかご侍婢は顔を見合せたれ行んといふものあし

妻は怒つて年も二八の侍女をとらへおのれ何とてゆかざるや早々
花を取來れと襟引立て池の面へ突倒しければ小女は忽ち水底に沈
み一とたひ浮みて奥力を白眼み慎悲の炎をつき亦水中に沈んで即
時小蛇身とあるこぼ怖しけれ小女を見惑思惑の煩腦日夜みいやま
と奥力を始めとしてろの怨念は腦をさされ苦しむこと阿鼻喚叫の地
獄に異ならず越前守と此よしを見ていかある因縁あるやまの患を
除うんと神に誓て祝詞を捧げ佛に頼んで小女成佛あさめんと法
華安樂行品の金口の所説提婆達多品の龍女成佛頻りし修行せし
ども怨靈猶も烈しけれむさしも強勇の越前守十方に暮て氣も勞ま
ず々寝むりし其夢に神仙たる翁越前守に告ていわく蛇身成佛を願
ひあははこの生實の村はづれに破れさる地藏堂あり此堂にて修行を
疑ら申道心者なり此僧を招き教化を頼むべしとの夢のつげ越前守
は正夢を受て直に地藏堂へ使を走らし道譽を請じ行々の物語して

頼みければ否をいわず領掌一丹誠を抽如來開經たる無量義經よ
り法華二十八品乃至結經の觀普賢經に至る迄供養し皆其大意を説
て煩腦即菩提と示し觀念して眼を閉念佛三昧あしれは忽然とし
て不動尊顯れたまひ道譽を告て曰く善哉々其蛇身を越前守が
妻の爲に落命し身を變ずといへども前生七世がその間無慈行欲に
て六親九族をも地獄に墮す是を救ふんには印文を彼が額に授けあ
は得道して佛果を得ん印文功德と謂は人皇六十三代たる
花山の法皇熊野の導よて觀音靈場を廻り玉ひし時閻魔法皇も同行
して極惡重罪を救ふ印文を傳へたり去れば今汝も印文を授んとて
より玉へハ雲霧の晴たる如く光明赫々たり道譽は不思議に有難く
我手を見るは明王より授かりし印文あり感涙して慈救の偈を修し
あがら蛇身に向つて印文を授けしれは慎悲を燃せし蛇身の姿忽佛
身と變じ能滅無明黒闇大光明と唱へて佛果を得るこそ殊勝あり道

譽は本尊の利生ふより佛恩報謝の大慈悲を拜し當山に來つて其印
文を後の世に殘さんと金印に寫して寶庫に納めける斯有難き寄得
ゆへ越前守は小女の沈し池を埋め一字を建立して龍澤山大願寺と
號せし後願を嚴と改む斯る利益の印文あれば當山寶庫に納め置處
衆人拜せんことを望む止ことを得ず業障成菩提の爲あはとて寶
庫を開き多千億の衆え拜授を與ふ是有信の輩本尊大慈大悲の徳に
て現世安穩後世善處の基あらんと爾云

成田山不動明王略縁起

成田山不動堂開基自天慶三庚子年
明治二十七年迄九百五十五年也
本院嵯峨御所別當神護新勝寺ト云

夫下總國成田山神護新勝寺之不動明王並み矜迦羅逝多迦の二童子

は弘法大師之御作ふして往古は洛陽の西高尾山神護國祚眞言寺護
摩の本尊や然るに此尊像を我山に安置し奉る由來も人王六十一代
朱雀天皇之御宇平朝臣相馬小次郎將門東國に在いて權威をふるひ
をこりををしひまゝにして下總國相馬郡石井の郷に新都をたて自
号して平親王と云且帝都をかたむけ王位をうばわんとするの謀計
そでに天間に達しぬ主上大にげきりんまゝしてときりに追討
の宜旨を下し諸寺の高僧に命じて降敵の秘法を終せしめ給ふその
中にも廣澤の遍照寺の僧正寛朝を殊に勅命をかふむり此尊像を
奉持して船を難波の津に浮べ南海の波どうをこのぎ東のかた下總
の海岸にちやくそこに將門々館へ遠からず近からず成田の里に
一字をかまへ尊像を安置して調伏の護摩を修めることあたかも頭
燃をはらふかおと降伏四魔の本誓あんがむあしからん敵軍たち
まちに敗北してこゝに馳聘しかるこに徘徊せるときに將門は平の貞

盛がはあつ箭にたつて馬よりをちるを見て俵藤太秀郷はしりか
つて首をはね朝敵終にほろびぬ是もつはら寛朝僧正の修功不動
明王の威力によれり其のち僧正不動尊を奉持して歸らくせんとし
たまふに尊像うごかざることを猶はんじやくのごとし僧正未曾有の
おもひをあしすあわち手を合せまをどちて至心にねんじたま
へは夢にもあらず現にもあらず明王告てのたまはくそれ衆生無邊
かれは我がねがいも無盡ありゆへふふかく信するものあれは所と
して應せずといふとあし我こもび王城よかへらんを欲せずあり
くこの地よちうして東國の凶奴をしつめ渴仰歸依のともがらに利
やくをほごこせべしと爾時に僧正聖言瞻にめいじかんるい袖をう
るほして思へらく是大明王無其所居但住衆生心想之中の金言しん
せせんそ有べからずあふがずんそ有べからずとせでにして帝都に
かへるにおよんでつふさよ此事を奏す主上叡感のたまりよ勅し

て伽藍を建立しそこばくの庄園を奇附し故山の寺號よじゆんじて
神護新勝寺と號し東國鎮護の靈場せしたまふ抑當尊は神用無邊よ
して靈驗もつとも多しあるいは女人産生の苦をまぬがれ海士漂泊
のあんをそくふ所持の寶劍を項戴せしむれは乱心狂氣も立どころ
よ止みねつひやう寒疾もそみやかよ愈めかくのごとくの奇瑞あげ
てかろうべからず但し信心深からざるをバ除くつたへいふ総州生
實大巖寺の開山道譽上人は天性愚鈍みして學業の進みかたさを
歎きかつて此尊よ歸依し參籠持念するを百日期限まんずる夜の夢
よ不動尊もちたまふ利劍をのむと見て則さめたりさめてのち是を
見れば黒き血あがれて床のほとりを穢せり然して後惠解人よそぐ
れ遂よ大德智人となりたまふとぞしかしてよりこのかた別しては
淨土一家の像とえて諸山負笈の客あるい日をかさねて參籠し
あるひと穀を絶て祈願するもの其靈顯を蒙らずといふとあし

